

哲学思想の基礎

第二部：世界を理解する哲学

担当：山口裕之

第一部とのつながり

- 倫理学：自由・平等・寛容といった「**原理**」にもとづいて、現実の人間の行動の是非を判断する。
 - 「原理**principle**」は、経験に根拠づけられるものではなく、むしろ**経験を評価・判断**するもの。

カントの「ウソ論文」

- 「そんなのムリ」
 - 現実に**実行可能**かどうかということと、原理そのものの是非は関係ない。
 - 倫理的原理は、「悪」に墮しやすい人間を導く**遠くの光**のようなもの。

「倫理学」の特徴

- 「普遍的原理」を求める。
- 原理や論理的推論が、現実を判断する基準になる。

＝「哲学」一般の特徴。

哲学は何でないか

- 人生論：個人の体験にもとづく「好み」や「便法」の体系。
 - 人生論は「人それぞれ」でもかまわないし、そこから得るものがあるかもしれない。
 - しかし、「哲学」は普遍を志向するから、「人それぞれ」ではない。

浮世離れ

「簡単なことをあえて難しく言う」「言葉遊び」

- 一見すると簡単に思えることの背後にある**不可解な**ことをさらけ出す。
 - 倫理学：自分が当たり前と思っている**価値観の根拠**を問い直す。
 - 自然哲学：自然法則が普遍的に妥当すること・この世界が存在することなどの「**理由**」は、科学ではわからない。
 - 科学は、あえて問うことをやめた不可解な部分を前提として成り立っている。

第二部の目的

- 主に「自然哲学」や「科学哲学」と呼ばれるような領域について、**哲学が何を問題にしているのか、なぜそれが問題なのか**を説明する。

哲学の特徴

- 体験よりも論理の方がエライ。
 - 紙と石は同時に落ちるはず。なぜそうならない！？
 - 子供に「 $1+1=3$ 」と教え込むことはできない。
- 個物より概念。
 - 物事を理解するとは、一般概念を把握すること。
 - うちの「ポチ」についての知識は、「ポチ」にしかあてはまらない。
- 論理も概念も、人それぞれでなく普遍的。
 - みんな同じ「普遍的理性Reason」を持っている。
 - だから、話し合わなくても大丈夫！

反逆者たち

- 論理より経験(実験): **経験論哲学**(ロック、コンディヤック) → 自然科学
 - 「経験experience」とは「個人的な体験」ではなく「**実験**=experior」。
- 概念把握より実在の直観的把握: **直観主義**(ベルクソン)
 - 「直観intuition」とは、「見たらわかる=in-tueor: 中に見る」。「直感」ではない。
- 普遍より話し合いによる合意形成: 対話的理性(ハーバマス)
 - 「話し合いのルール」は話し合いを行う前提だから、**何でも話し合いで決めるわけにはいかない。**

経験より論理

- 哲学の始まり: パルメニデス (BC.5C)
 - 探求の道は二つ、「あるものはある」か、「ないものはない」か。
 - 存在は、一にして不変。
 - われわれが経験する生成変化は「根拠のない思い込み(ドクサ)」。
 - この「ある」とは、be動詞。
- 有名な「ゼノンのパラドックス」は、パルメニデス擁護論。

生成変化がぜんぶドクサ、というのは さすがにちょっと...

- エンペドクレスの「4元素説」
 - 地水火風の4元素(不変の要素)の組み合わせによる生成変化の説明。
- デモクリトスの「原子説」
 - 原子(不変の要素)の組み合わせによる生成変化の説明。
 - 原子が動き回るためには「空間(なにもないもの)がある」という矛盾をはらむ。

プラトンのイデア論

- 生成変化の背後にある**不変のイデア**を想定。
 - 生成変化の背後にある**不変の「自然法則」**を探求する科学は、哲学の直系の子孫。
- われわれが個物や個々の行為を見るとき、イデアも見て取られる。
 - イデアは**「見る」**の名詞形。
- 「イデアの世界」が実在する(**exist** = ex-sisto : 外に-立てる)。
 - 論理にも概念にもリアリティ(**reality** = res : もの)がある。人間の都合で勝手に変えられない。
 - **でも、どこに「実在」するの？**

ここまでのまとめ

- 哲学の特徴：経験より論理、個物より概念。
 - 論理に従うと、「生成変化」が謎に。
 - 概念にはリアリティがあるが、概念はどこに実在するのか？
- 「存在」にかかわる哲学用語：be・existence・reality
 - 日本語だとみんな「実在」みたいに訳してしまうが、まったく別の由来の言葉。西洋哲学(ないし西洋語)の「世界観」をあらわしている。